

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 1 5 号

2020年3月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (15)

第 16 講 善導・源信・源空に学ぶ

「導源」の由来

今日は6月10日、恵心僧都の御命日・ご永眠日に当たっております。…今日は「善導・源信・源空に学ぶ」と題して話をしたい。

私は2年前80歳になりましてから、導源と申しております。善導の導という字と、源信の「源」という字を取りまして、2年前から導源と自分で申している。2, 3の私の若い友人は、私を「導源先生」と言ってくれています。私はそれを受けている。それはなぜかとお言いますと、私は善導大師、源信、源空と、このお三人の態度に学びたい。すこしでも真似をしたい。もちろん彼ら三人は、阿弥陀仏が救い主です。私の救い主はイエス・キリスト。救い主は名前が違ふ。私の救い主は、主イエス・キリストです。しかしながら、彼ら三人が彼らの救い主を信じましたその態度から学びたい。

善導から学んだ点

善導から二つ。まず第1は、善導という方は「観無量寿経」というお経の注釈を書いた。これが「観経疏」となって、世界中これ以上の注解書は出ない。この「観経疏」の中に、善導曰く「この経によりて深く信行する者は、必ず衆生を誤らず」と言った。この善導のお言葉が私の心から離れない。善導大師は、この「観無量寿経』のお経を深く信じて行う者は必ず衆生を必ず正しく導く、と言った。私は、この言葉をロマ書に移したい。『ロマ書を深く信じて行う人は、衆生を、人類を、正しく導く』と、そう移したい。

善導大師は、「信ずる」という字を取ってしまった

次。善導大師は、キリストで言ったら最も大事な福音の場所ですが、これを「本願」と申しておりますけれど、本願を善導大師は注釈した。注釈した時に、本文には「信じて称名する」と、「信ずる」という字と「称名」という字と二つ書いてある。それを善導大師は、「信ずる」という字を取ってしまった。「称名」一本にした。そうですから善導大師は、「信ずる」という字なしに、ただ「称える」というだけで救われるのだと思えば信仰がついて来る、主観的には称名一本と、こう理解することがすなわち信仰を含むことになる。実験上、信仰が含まれてくる。そういうことを善導は初めて言った。以上善導、終わり。

妄念のうちより称名せよ

今度は恵心僧都。恵心僧都は、「横川法語」。「妄念のうちより称名せよ」という文句。妄念というのは、信仰がない。信仰がないまま称名せよ、これで必ず浄土に生れる、と言った。それから恵心僧都でもう一つ、「我々は極楽に行くまで妄念の凡夫」と言った。向この国に行ったときに初めて覚りの心になるといった。これが源信から学んだ点。

源空・法然上人から学んだ点

第 1、法然上人のお言葉に「阿波介という一文不知の陰陽師が申す念仏と源空が申す念仏と変わり目なし」。阿波介というのは芳之助とよく似ている。阿波介という陰陽師——占い師でしょう——陰陽師が申す念仏と私が申す念仏と一緒にと言われた。私はこの文句が最もうれしい。「阿波介という一文不知の陰陽師が申す念仏と源空が申す念仏と変わり目なし」。

源空から学ぶ点、もう一つ。源空のお言葉、「信じても信ずべきは乃至十念の言葉、下十声に至るまで、乃至十年の言葉。頼みても頼むべきは必得往生、必ず往生する、の文句なり」。繰り返す。「信じても信ずべきは乃至十年の言葉。下十声に至るまで、乃至十念の言葉。頼みても頼むべきは必得往生、必ず往生するという文句なり」。

これをロマ書に移したら、「信じても信ずべきは『主の名を呼ぶ者は』の文句であり、頼みても頼むべきは『すべて救われる』の文句なり」。ロマ書 10 章 13 節に尽きる。

二河白道の例え

第2番目は、3人から共通に、一つのことで感銘を受けた文句。それは、「二河百道の例え」という例えがある。善導大師が例えた二つの河、一つはむさぼりの河、一つは怒りの河。人生はむさぼりと怒りとの河であるが、その真ん中に細い道があって、称名していく細い道がある。その細い道さえ伝っていたら、怒りとむさぼりの川へおちずに向こうの岸へ着くと、そういうたとえを善導大師が話した。その時に善導大師は、その河を渡って向こうへ、浄土へ着いた時の「その時の喜び、極まりなからん」と言われた。この二河百道の譬えを、法然上人も非常に気に入っておられまして、実に最後に、この比喻のことを法然は話しました。源信・恵心僧都も子の比喻を非常に大切にしまして、この比喻にあうことが人生の宝だ、人生の意義はここにあると源信が言われた。ことほど左様に、この二河百道の譬えは有名です。その中心は、向こうへ着いた時に、「その時の喜び、極まりなからん」と善導は言った。恵心僧都も、その時の喜び如何と言われた。…

これが、お三人から共通に感銘を受けた言葉。第2、終わり。

声について決定の思いをなせ

第3は、『雑』ですが、これは法然上人お言葉でしたか、「声について決定の思いをせよ」。「わが主イエスよ、わが主イエスよ。」法然上人は「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」です、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」。この声、聞こえる声について必ず行くんだ、そう思えと言われた。声について、決定の思いをなせ。

これは「観音経」、観世音菩薩のお経ですが、私の実家は観音経、観世音菩薩を非常に尊敬した、養家の方は阿弥陀仏、同じく浄土宗ですけれども。この「観音経」のなかに、「生老病死の苦、漸をもって滅せしめたもう」と書いてある。「生」生きる苦しみ、「老」年よりの苦しみ、「病」病気の苦しみ、「死」死ぬ時の苦しみと、この人生の苦しみは漸をもって滅せしめたもう。内村鑑三は「聖霊は徐々にくだる」と言ったが、我々の苦しみも徐々になくなる。

観世音菩薩とイエス・キリスト

「観音経」には又「無畏を施したまう」と、「施したもう」と書いてある。「無畏」と言ったら「恐れなきの心、平安なる心」を観世音菩薩与は与えると書いてある。私は、イエス・キリストは観世音菩薩に勝るとも劣らぬ力を持つと確信する。イエス・キリストは力において観世音菩薩に負けないと思うな。観世音菩薩ですらわれわれに生老病死の苦を漸をもって滅せしめたもう、いわんやイエス・キリストにおいてをや。「大無量寿経」というお経の中に、「易往にして無人」と書いてある。「易往」と言ったら「行き易く」、「行き易くして人為し」と書いてある。

以上、私の「雑」 *miscellaneous words* を終わります。

源信の歌と小西の歌

最後に私の希望。これは恵心僧都の歌、

我だにも まず極楽にうまれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

我だにも まず極楽にうまれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

これは源信の歌。

私の歌、

我だにも まず天国にうまれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

我だにも まず天国にうまれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

皆によって祈りて。以上、感想終わり。